

わが国における都会の若者の自殺未遂経験割合とその関連要因に関する研究
 -大阪の繁華街での街頭調査の結果から-

お問い合わせ

日高康晴
 関西看護医療大学看護学部 講師
 京都大学大学院医学研究科 非常勤講師
 (現所属) 玉塚大学看護学部 教授

Don Operario
 Department of Social Policy and Social Work
 University of Oxford

岳中美江
 財団法人エイズ予防財団 流動研究員

大森佐知子
 名古屋市立大学大学院看護学研究科 博士課程

市川誠一
 名古屋市立大学看護学部 教授

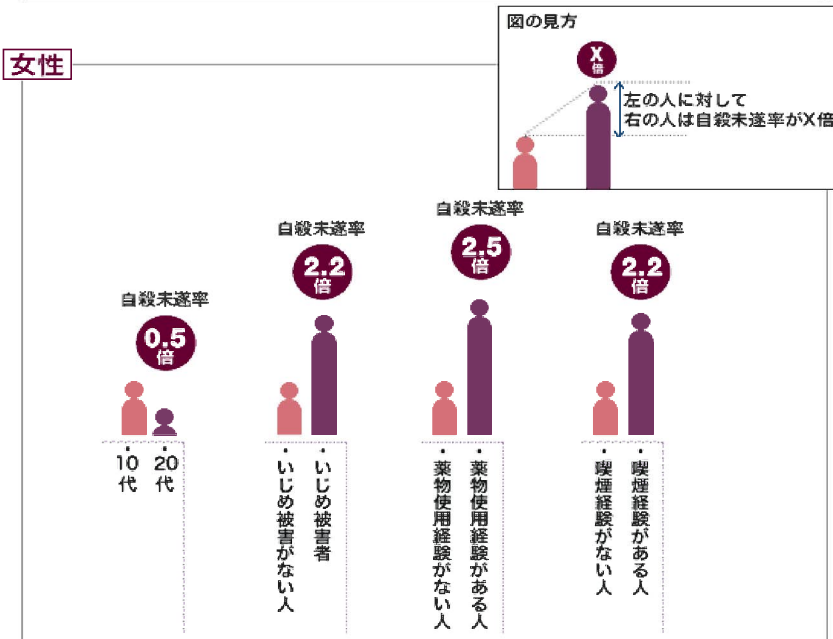
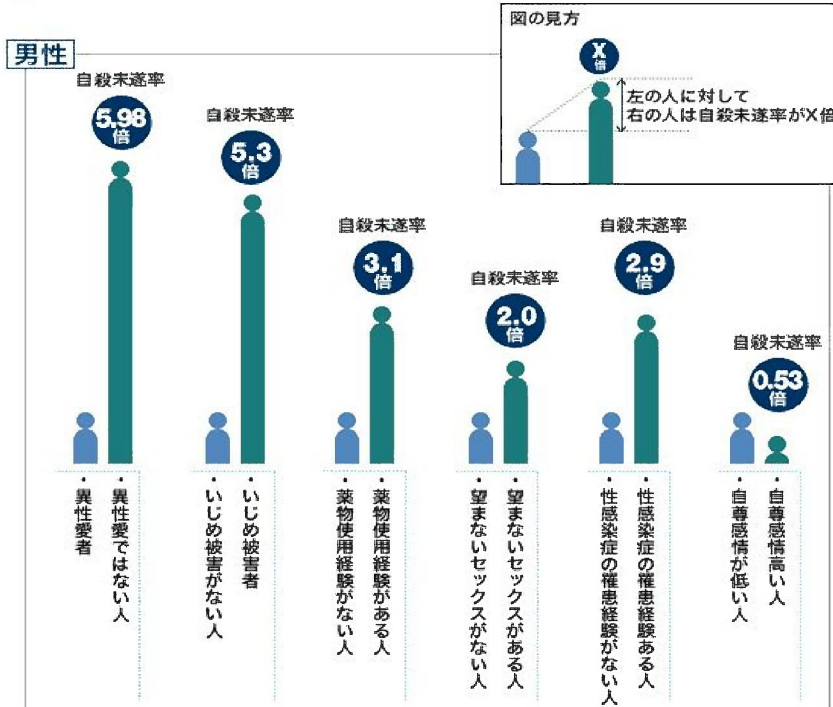
白坂琢磨
 (独) 国立病院機構大阪医療センター
 HIV/AIDS先端医療開発センター長

主な研究結果

2,095人(男1,035人、女1,060人)のうち、生涯における自殺未遂割合は全体で9%、性別では男性で6%、女性で11%でした。

とりわけ、男性においては性的指向が自殺未遂経験に関連する決定的要因であることが明らかになり、異性愛でない人の自殺未遂率は異性愛者の約6倍であることが示されています。

1 自殺未遂経験に有意に関連する要因



本研究の目的

わが国では自殺者が急増しており、世界の中でも自殺による死亡率が高い状況にあります。1998年以降、毎年3万人が自殺によって亡くなられており、15歳～24歳の自殺による死亡者数も多く、若者においても自殺の危険性が高い層であることが示されています。海外の研究によれば、自殺に関連する要因として①個人要因（年齢、性的指向など）、②対人関係要因（学校でのいじめ経験、家族関係）、③健康リスク要因（性活動、ドラッグ使用経験、飲酒経験、喫煙など）、④心理学的要因（自尊感情など）が複雑に絡みあって起こると示唆されています。しかしながらわが国では、自殺既遂に関連するいくつかの要因が指摘されているにとどまり、広く一般的な若者の自殺未遂に関連する要因については、量的調査としてこれまであまり明らかにされていませんでした。

よって本研究の目的は、わが国における都市部コミュニティの若者の自殺未遂の予防に役立てるために、自殺未遂の実態とそれに関連するリスク要因を探索的に明らかにすることです。

方法

街頭において無記名自記式質問票調査を実施

大阪で多くの若者たちが集まるアメリカ村において、無記名自記式質問票を用いた街頭調査を実施しました。（調査期間：2001年8月～9月）。

トレーニングを受けた調査員が、研究対象者に調査参加の同意を得て、一人で回答出来る場所へ移動してもらった後に、無記名の質問票に回答してもらいました。そして、回答の終了を調査員が確認した後に質問票を厳封しました。研究参加者には謝礼として1000円相当のギフトカードを呈し、本調査で扱った健康問題のパンフレットをお渡ししました。

参加者の取り込み基準

- 性経験があること
- 月に一度はアメリカ村に来る人
- 近畿地方に住む人
- 15歳～24歳の人

質問項目

年齢、性別、性的指向、自殺未遂歴、学校でいじめを受けた経験、家族と同居しているか、薬物の使用経験、喫煙・飲酒の有無・頻度（ほとんどない、機会があれば、いつも）、性的リスク要因、望まないセックスをした経験、性感染症の既往歴、お金をもらってセックスをした経験、自尊感情について尋ねました。

データ分析

4,650人に研究参加を募る声かけを行い、有効回答数2,095人（男性1,035人、女性1,060人）を分析の対象としました（図1参照）。自殺未遂経験を独立変数として、個人要因（年齢、性的指向）、対人関係要因（学校でのいじめ経験など）、健康リスク行動（性行動、薬物使用経験、喫煙経験）、自尊感情尺度得点（中央値で高群・低群に2群化）を従属変数として χ^2 検定を男女別に行いました。その後、自殺未遂経験を従属変数として、男女別にロジスティック回帰分析を行いました。